

播磨の古代寺院と造寺・知識集団 5

明石郡一太寺廃寺、高丘窯跡群

寺 岡 洋

明石郡唯一の古代寺院・太寺廃寺

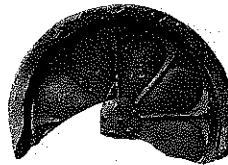
前回まで文献により「知識」や知識集団について紹介してきましたが、今回から現地を歩きます。まずは、播磨の東端に位置する明石郡からです。

古代の明石（赤石とも表記）地域は、おおよそ現在の神戸市垂水区・西区から明石市域になる。『播磨国風土記』では冒頭の赤石郡の記事が失われているため、託賀郡（たかのこおり）の記事に「赤石郡大海里……」とある以外、里名は不明。『和名類聚抄』では、葛江（ふじえ）、明石、住吉神戸、邑美（おうみ）、垂見神戸の5郷からなる。これらの郷名のうち、藤江、明石、垂水は今も地名で残る。飛鳥京跡苑池遺構出土の木簡には、「播磨国明伊川里」とあり、伊川里がある（奈文研木簡データベース）。

明石郡の古代寺院は一ヶ所しか知られていない。唯一の古代寺院である太寺（たいでら）廃寺（明石市太寺）へは、JR明石駅から明石城の堀端を歩き、明石市立文化博物館の前を通り、東北へ1km強、高家寺（こうげい）・高家幼稚園を目指す。一帯は30m前後の丘陵で、廃寺は丘陵南端の比高約20mの位置に立地し、淡路島、瀬戸内が見渡せる。海岸へは南に1km強。字名は大蔵谷。

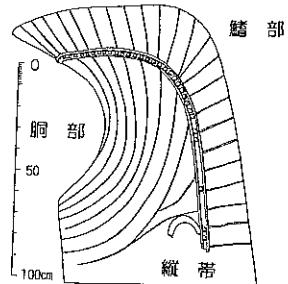
太寺廃寺の周辺には古代山陽道の明石駅家（うまや）が想定されている。須磨駅家→明石駅家間のコースについては、山越えと須磨→塩屋→垂水の海岸沿いの二通り想定されているが、いずれの道をとっても太寺廃寺周辺で合流する。周辺には摩耶（まや）坂、摩耶谷の地名が残り、駅家と関連する地名（うまや→まや、と転訛）とされる。

万葉集に残る、「明石大門（おほと）」、「明石の門（と）」、「明石之湖（みなど）」、「明石の浦」などは、明石海峡・明石川河口を詠んだもので、柿本人麻呂や大伴旅人も太寺廃寺を船から眺めたであろう。遣新羅使も天平八年（736）、明石の浦で舟を泊め、仮泊している。また、平安時代の承和十二年（845）には、「淡路国岩屋浜と播磨国明石浜に始めて



高丘窯で焼かれた蓮華文軒丸瓦

奥山廃寺（IVA形式）軒丸瓦



高丘3号窯出土の鰐尾（しひ）

船ならびに渡子（わたし）を置き以て往還に備う」（『続日本後紀』）とあるように、明石は山陽道と淡路・四国（南海道）をむすぶ結節点でもあった。

太寺廃寺の発掘調査

太寺廃寺は塔跡や現地で採集された瓦類が古くから知られている（鎌谷木三次『播磨上代寺院跡の研究』成武堂 1942年）。鎌谷木三次（かまたにきそじ）氏の踏査記録は、まだ市街地化していない時代のものとして貴重なもので、これからもずっとお世話になります。

塔跡には土壇・礎石・塔の心礎などが残されており、土器の細片も探せば見つかる。土壇の規模は、東西12m、南北8m、高さ約1.5m。出土瓦については、後日、まとめて報告したい。伽藍配置については鎌谷氏により、東に塔、西に金堂、現在の高家寺本堂が建つ位置に講堂を配する法起寺式が、寺域は100m四方と推定されている。

高家寺は2003～04年に修復工事がなされ、発掘調査が行われた（『高家寺本堂修復工事 報告書』監修 黒田龍二 発行 高家寺 2008年）。

調査は本堂の北・東縁で行われ、掘立柱建物の北端部等が検出された。7世紀後半の須恵器や瓦が出土することから、この時期に僧坊等の施設が存在したとされる。ただ、僧坊であれば、講堂の立つ場所が無くなるか、極めて狭い場所になる。

調査区からは、白鳳時代以降の瓦が多数出土した、とあるのみで詳細は不明。その中には、「播磨国府系瓦」とよばれる播磨国分寺で使われた軒丸瓦と同文（同じ文様）・同範（同じ範型で作った瓦）のもの、さらに、平安京から出土する軒丸瓦と同文のものが出土している。これらの瓦の出土から、太寺廃寺は播磨国府が管理する寺院、あるいは播磨国の施設としての性格をもつ寺院であった、とされる。

高家寺の北で行われた発掘調査では、掘立柱建物跡、炉跡等が見つかり、出土した遺物から寺の建立と関連する工房跡と推定されている（『太寺廃寺と高家寺』明石市立文化博物館 2004年）。今年3月に訪れた時、本堂東側の畠を発掘していたので、新たな資料が得られたかもしれない。

周辺の遺跡 寒風遺跡（神戸市西区伊川谷町）

太寺廃寺から北へ1km弱、明石川の支流・伊川（いかわ）を望む丘陵端に立地する。寒風（かんぶう）遺跡では、渡来系集団居住の指標とされる大壁建物が3棟調査されている（『平成11・12年度 神戸市埋蔵文化財年報』2002・2003年）。この大壁建物については、『播磨國風土記』韓室里の韓室（からむろ）と呼ばれる建物と考えられる。

寒風遺跡は、100棟を優に超す堅穴建物、掘立柱建物、大壁建物が密集、重複する。出土遺物の年代は「概ね5世紀末～6世紀中頃（TK23～43）」とされる。この時期、伊川を見下ろす丘陵上に突然と大規模な集落が出現したことになる。

また、平安時代の遺物には、青磁、白磁、縁釉・灰釉陶器、瓦、石帯、陶硯（とうけん）などが見られ、とくに瓦の出土量が多いと特記される（『平成7年度 神戸市埋蔵文化財年報』1998年）。

高丘窯と四天王寺、奥山久米寺（奥山廃寺）

古代寺院ではないが、初期古代寺院の瓦を焼いた窯として知られる高丘窯跡群（明石市大久保町）を紹介したい。明石川西側の丘陵に位置しており、太寺廃寺から直線距離で6kmばかり離れる。行基五泊の一つ、魚住泊（明石市江井島）へは南に4km強。住宅団地建設等に伴って窯跡が20基調査された（『明石市資料（考古篇）第四集』明石市教育委員会 1985年）。須恵器（すえき）も瓦も焼く瓦陶兼業の窯である。時期は、6世紀末～8世紀中葉にかけて操業しており、7世紀中葉ころが最盛期であった。極めて注目される遺物に鶴尾（しひ）と蓮華文軒丸瓦（れんげもんのきまるかわら）がある。初期の古代寺院の瓦を焼いた窯跡は、渡来系技術者集団（瓦工）が関与したと考えられている。

高丘窯と魚住泊の中間には東播磨最古の須恵器窯跡がある（『赤根川・金ヶ崎窯跡』明石市教育委

員会 1990年）。日本列島では極めて珍しい角杯形土器（角杯）、装飾付須恵器、陶板などが出土し、渡来工の関与が濃厚な窯跡である。

鶴尾（東播系鶴尾・沈線文鶴尾）

鶴尾は寺院大棟の両端に飾られる大型の装飾用瓦で、奈良の大仏殿や唐招提寺のそれは有名である。なぜか、この鶴尾が播磨では多く出土する。

四天王寺（大阪市天王寺区）の旧講堂大棟西端から落下粉碎し、復元された「四天王寺C例」と呼ばれる鶴尾は高丘瓦窯で焼いたものと推定されている。この鶴尾は、削り出して作る鰭（ひれ）部の段の形や、胴部の鱗の形を箇（へら）描きの沈線によって代用するという特徴がある。

出土した鶴尾と須恵器を検討された春成秀爾氏によれば、最も先行する鶴尾として、四天王寺C例と推定高丘窯出土品を置き、その年代を7世紀中葉に、そして高丘3号窯鶴尾を7世紀第4四半期に比定された（『明石発見の鶴尾新資料』『古文化論叢 藤澤一夫先生古稀記念』1983年）。

播磨では、7世紀中葉に造られた寺院は確認されておらず、7世紀第4四半期（675～675年）になり建立が始まる。つまり、高丘窯は中央直結の窯であった。ちなみに、四天王寺C例に続く高丘3号窯出土鶴尾は、縦帶（じゅうたい）と呼ばれる胴部と鰭部を区画していた沈線を二条の突帶に代え、その間に小粒の珠文を配するもので、装飾性が増している。明石市立文化博物館の目玉展示品である。

この沈線によって施文された鶴尾は東播磨に比較的まとまって分布する。広渡（こうど）廃寺・新部大寺（しんべおおでら）廃寺（小野市）、繁昌（はんじょう）廃寺（加西市）、石守（いしもり）廃寺（加古川市）、それに、太寺廃寺からも破片が一点出土している由。その分布に視点をおいて、「東播系鶴尾」とも呼称される（菱田哲郎「鶴尾の生産と地域色—東播系と西播系—」『古代文化』第40巻6号 1988年）。沈線に特徴をみると「沈線文鶴尾」となる（大脇潔『日本の美術 392 鶴尾』監修 文化庁他 1999年）。西播磨では縦帶に蓮華文を飾る華麗な蓮華文帶鶴尾がまとまって分布し、渡来系の漢人（あやひと）集団の関与が指摘されている。

素弁八葉（そべんはちよう）蓮華文軒丸瓦

2・5・7号窯では素弁八葉の蓮華文軒丸瓦が出

土しており、なかでも、7号窯出土のものは飛鳥・奥山久米寺(奥山廃寺)の軒丸瓦の一種と同様であった(『兵庫県史 考古資料編』1992年)。

清水昭博氏によれば、豊浦寺(とゆらでら)ⅢE、奥山廃寺IVA、雷丘東方遺跡出土の船橋廃寺式と呼ばれる軒丸瓦は高丘窯で焼成されたとある(図録『蓮華百相』一瓦からみた初期寺院の成立と展開ー』橿原考古学研究所付属博物館 1999年)。また、前述の春成氏によれば、四天王寺二期第三形式にきわめて近いとも指摘されている。

つまり、高丘窯跡で焼かれた重い瓦を飛鳥や四天王寺まで運んでいたのである。このことは、豊浦寺・奥山廃寺・四天王寺の造営集団と高丘窯を操業した集団とが密接な関係があったことを裏付ける。

なぜ明石だったのか

高丘窯跡での鵠尾や瓦が在地寺院の需要のためではなく、四天王寺や飛鳥の地での寺院のために運ばれたのであれば、なぜ遠い明石だったのか。

上原真人氏は縮見屯倉(しじみのみやけ)と関連するとされる(「初期瓦生産と屯倉制」『京都大學文學部研究紀要』第四十二号 2003年)。縮見ミヤケの比定地は現在の三木市志染町あたりであるが、文献からも考古資料からも高丘窯と関連するかどうか現在のところ不明である。

ミヤケはミヤケでも縮見ミヤケではなく、蘇我氏が主導した吉備の白猪(しらい)ミヤケや児島ミヤケと関連するのではないか。高丘窯は、至近に位置し、渡来系工人が関わったであろう赤根川窯の系譜を引く可能性が高く、その赤根川窯は東漢氏(やまととのあやうじ)や蘇我氏などとも早くから関係をもっていた可能性が考えられる。

高丘窯の製品は赤根川河口の魚住泊から積み出されたであろうが、魚住泊は難波津から吉備のミヤケへの海路の途中にある。吉備の末ノ奥窯からは、高丘窯に続く形式の瓦が豊浦寺へ運ばれるのも、蘇我氏が関与したことを見出せるものである。

古代明石郡「人名録」、太寺廃寺の壇越(だんおつ)

明石郡に関連する人名を文献・木簡から拾い上げてみる。地方寺院の造立者として最も有力なのは、郡・評(こおり 郡の前身組織)の役人になる階層、いわゆる郡領層である。彼らが知識集団として寺の

建立、維持運営にあたったと考えられ、その候補者リストである。風土記を欠くので平安時代初期まで含めても数名分が判明するのみ。

・海直(あまのあたい) 溝長

『続日本紀』神護慶雲三年(769)条に、「播磨国明石郡人外從八位下 海直溝長ら十九人に大和赤石連」とある。JR山陽線垂水駅の南には式内社の海(かい)神社があり、舞子・垂水・塩屋など海岸を地盤にする氏族であろう。後背の丘陵にはT字形横穴式石室や石室内の火葬など、特異な習俗をもつ群集墳が築かれており、巨石墳も残る。

・葛江我孫(ふじえあびこ) 馬養

『続日本紀』延暦九年(790)条に、「播磨国明石郡大領 外正八位上 葛江我孫馬養 外正六位上を授く」とある。明石川西岸に藤江という地名が残り、高丘窯跡群はこの氏族の勢力範囲であろう。

・赤石貞根

『扶桑略記』延喜六年(906)条に、「播磨明石郡大領 赤石貞根を外從五位下に。私穀五千石」

「木簡データベース」、「住吉神社神代記」

・海直惠万呂 前述の飛鳥京跡苑池遺構出土木簡の人名。伊川流域にも海直の居住が確認できる。

・桜嶋時嶋 天平十九年(747) 藤江里

・丹人部由毛万呂 葛江里

・『住吉神社神代記』では、明石郡に船木連宇麻呂、船木連鼠緒、船木連弓手がいる。

太寺廃寺の壇越(造立者、後援者)について

残された資料で太寺廃寺の造立者を考えてみたい。奈良時代になるが、海直溝長の官位を見ると、大領である葛江我孫馬養の官位とほぼ同位であり、郡司クラスである。100基を超す群集墳、52mにもなる二重の周溝をもつ巨石墳(狩口台きつね塚古墳 6世紀後葉~7世紀初頭に組合せ式家形石棺を追葬)は海直氏の勢力範囲に造られている。

大領・少領・主政・主帳の四等官で構成される郡司のうち、一人のみが氏寺を建立する(できた)とするのはバランスを欠き考えにくい。ましてや、郡司の平均在位は10年末満とあればなおさらである(須原祥二「8世紀の郡司制度と在地—その運用実態をめぐってー」『史學雑誌』105-7号 1996年)。となると、太寺廃寺は在地有力者集団の知識による建立、としか考える余地はない。